

【書評・紹介】

A.R.アルテームエフ 著 垣内あと 訳 菊池俊彦・中村和之 監修
『ヌルガン永寧寺遺跡と碑文—15世紀の北東アジアとアイヌ民族—』
(札幌, 北海道大学出版会, 2008年2月, A5版 138+x 頁, 5000円+税)

中村 和之

表紙画像

本書は、北東アジアの考古学に大きな足跡を残した、故アレクサーンドル＝ルドリフォーヴィチ＝アルテームエフ博士の著作『アムール川下流域の15世紀の仏教寺院』の全訳である。著者のアルテームエフ氏は、ロシア連邦ウラジオストーク市のロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史学・考古学・民族学研究所の副所長という要職にある考古学者であったが、2005年12月27日に急逝された。逝去の直前の2005年11月12日に、アルテームエフ氏は北海道大学の菊池俊彦教授の招聘で札幌市を訪れた。北海道大学で開催された国際シンポジウム「ヌルガン永寧寺碑文と中世の北東アジア」で講演をするためである。このシンポジウムには、中国長春市の吉林省社会科学院の楊暘氏^{ようよう}も参加した。『アムール川下流域の15世紀の仏教寺院』は、このシンポジウムの1週間ほど前に刊行されたばかりとのことだったが、アルテームエフ氏は刷りあがったばかりのその本を、菊池教授と私にプレゼントとして持って来てくれた。

本書の構成は次のようになっている。

監修者序文 菊池俊彦

序

第1章 ティル遺跡の発見と研究史

第2章 永楽年代寺院

第3章 宣徳年代寺院

第4章 1260年代の祠堂

おわりに

図版・表

付 録

付録1 永楽年代寺院址出土資料の古植物学分析 E.Yu.レーベジェヴァ

付録2 宣徳年代寺院の建築の漆喰 E.V.メードニコヴァ

付録3 ティル仏教寺院の瓦と煉瓦の製造技術調査結果 O.A.ロパーチナ

付録4 アムール川下流域における15世紀仏教寺院の文化層から発見された新石器時代の遺物 A.R.アルテームエフ

参考文献

解 説 奴児干永寧寺碑文とアイヌ民族の動向 中村和之
著者・監修者・訳者紹介

本書の内容の紹介に入る前に、ヌルガン（奴児干）永寧寺に関する研究史を簡単に紹介しておきたい。

ヌルガン永寧寺は、15世紀の初頭に中国の明がアムール川の最下流のヌルガン（今日のティル村）に建立した寺院である。明の永楽帝は、イシハ（亦失哈）という女真人の宦官が率いる軍隊をアムール川に派遣し、ティル村にヌルガン都司という役所を置いた。イシハは、ヌルガン都司に併設して永寧寺を建立し、その顛末を記した石碑を立てた。これが1413（永楽11）年の「勅修奴児干永寧寺記」である。イシハは、前後7回ヌルガンの地を訪れたが、最後の遠征となった1432（宣徳7）年にヌルガンに至った時、永寧寺が現地の住民によって焼かれたのを見た。イシハは寺を再建し、その事情を記した石碑を立てた。これが、1433（宣徳8）年の「重建永寧寺記」である。これらの石碑には「苦夷」との朝貢交易についての記載があるが、苦夷とはアイヌ民族の祖先のことである。

この二つの石碑については、1809年に間宮林蔵がデレンからの帰りに、船の上から見て絵に残しているが、林蔵は上陸していないので、碑文の内容を知ることはなかった。碑文の内容が知られるようになったのは、1885年に曹廷杰がティル村を訪れ、二つの石碑を拓本に採ってからである。曹廷杰の拓本をもとに、1891年に刊行された『吉林通志』の金石志に釈文が発表され、明のイシハの遠征に係する石碑であることが広く知られるようになった。その後、石碑はウラジオストークに移され、容易に見ることができるようになった。日本では、内藤湖南や白鳥庫吉といったわが国の東洋史学の黎明期の学者たちが、永寧寺碑の研究に着手した。しかし、それはあくまでも碑文の釈読と『明実録』などの史料とを照合した文献学的な研究であった。現在この分野では、楊陽氏が、中国東北史の著名な研究家である金毓黻旧蔵の永寧寺碑拓本を利用して、最も大きな成果を収めている。

一方、鳥居龍蔵は1919年と1921年にティル村で遺跡を現地調査し、その結果に基づいて、1947年に「奴児干都司考」（『燕京学報』第33期）を中国語で発表した（日本語訳は『鳥居龍蔵全集』第6巻、朝日新聞社、1976年に収録）。この論文は、歴史学的な史料操作の上に現地調査の成果を盛り込み、今日でも参照すべき基本文献のひとつとなっている。

以下に、本書の概略を紹介しよう。第1章は17世紀末からの、ロシア人を含むヨーロッパ人によるティルの遺跡と石碑の発見、および碑文の研究史が詳細に叙述されている。第2章～第4章はアルテミエフ氏によるティル村での永寧寺址の発掘調査の報告である。アルテミエフ氏は、1995年、96年、98年、99年、2000年の5回にわたって永寧寺址を発掘調査した。鳥居龍蔵の調査は二回とも、半日程度のものであったから、初めての本格的な学術調査といえるものである。アルテミエフ氏は、これまで永寧寺址と考えられていたティルの断崖上の地点から、西側に90ほど丘を下った位置に、もうひ



永寧寺址のあるティル村の位置（本書3頁）

とつての建物の址を発見した。アルテームエフ氏は、ここを第Ⅰ地点とし、永楽年間の永寧寺が建立された位置と考えた。また、これまで永寧寺址と考えられていた所を第Ⅱ地点とし、宣徳年間の永寧寺と元代の観音堂が建立された位置と考えた。永楽年間の永寧寺より前に、観音堂が建てられていたことは、1413年の「勅修奴児干永寧寺記」に記されている。アルテームエフ氏の考えによれば、元代の観音堂（第Ⅱ地点）から永楽年間寺院（第Ⅰ地点）へ、そして宣徳年間寺院（第Ⅱ地点）へと、永寧寺は移動しているというのである。その論拠はいくつかあるが、そのひとつは、第Ⅰ地点から出土する瓦と煉瓦の遺物の量が少なく、かつ同じ瓦と煉瓦が第Ⅱ地点からも出土するのに、第Ⅱ地点にのみ出土する瓦と煉瓦が別に存在するというものである。アルテームエフ氏は第Ⅰ地点に建てられた永楽年間の永寧寺が焼かれて、宣徳年間の永寧寺を再建する際に、再利用可能な建材を第Ⅰ地点から第Ⅱ地点に移して利用したために、このような現象が起きたと考えた。また、第Ⅱ地点からは、第Ⅰ地点より古い時代に属すると思われる遺物が少量ながら出土した。アルテームエフ氏は、それらの遺物を元代の観音堂のものと考えたのである。

以上のように、本書はアルテームエフ氏の発掘成果の報告書に留まらず、ロシア・中国・日本などの先行研究の検討を踏まえた、アルテームエフ氏の独自な見解を述べた研究書としての内容も持つ著作である。また、192点に及ぶ図版が読者の理解をより深めるであろう。今後の北東アジアの地域史研究において、常に参照されるべき重要な著作といえる。ちなみに、本書の図版は白黒印刷であるが、ロシア語の原著の図版はすべてカラー印刷という豪華版である。

なお、上述の2005年11月12日の国際シンポジウム「ヌルカン永寧寺碑文と中世の東北アジア」の成果もこの度、刊行された。すなわち、菊池俊彦・中村和之編『中世の北東アジアとアイヌ—奴児干永寧寺碑文とアイヌの北方世界—』（高志書院、2008年3月、7000円＋税）である。同書には、アルテームエフ氏の講演「アムール川下流域の13～15世紀の仏教寺院」が収録されている。また、アルテームエフ氏の夫人で、女真時代の考古学者として有名なナデーダ＝Gアルテームエヴァさんによる「アレクサーンドル＝Rアルテームエフの生涯と業績」と「アレクサーンドル＝Rアルテームエフ博士著作目録」も収録されている。あわせてご覧いただければ幸いです。

なお、原著の表題は下記のとおりである。

Artem'ev A.R., *Buddijskie khramy XV v. v nizov' yakh Amura, Vladivostok.*, 2005.

(なかむら・かずゆき／函館工業高等専門学校)